



château du

日本語

# Haut-Koenigsbourg

Bien plus qu'un monument



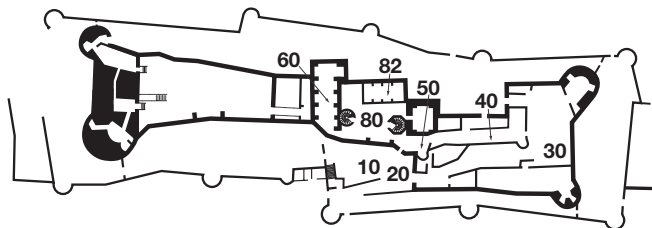
## 歴史

ホーヘンシュトーフエンから今日まで

「片目の男」の異名をもつシュアーベン公爵こと、フレデリック・ド・ホーヘンシュトーフエンは、シュトファンベルク (Stophanberch) 山の戦略的な地の利の重要性を繰り返し説いたに違いありません。この山の標高は755mで、平地に対して直角をなしながら東西に貫いており、この城の記述がすでに12世紀に初めて登場します。この岩の突出部は交易の盛んな街道の交差点に位置しています。南北に貫く小麦とワインの街道、東西に貫くのが塩と銀の街道でした。ハプスブルグ家の所有に帰された城は、1479年にティエルシュタイン家に領地として与えられました。同家は城を建て直し、大砲に対する防御のために改造しました。30年戦争では、フィリップ・ド・リエヒテナウ大將軍がここでスウェーデン人の攻撃に一月以上も戦ったという経緯がありますが、最後には城は略奪にあい、焼け落ちたのです。その後、約2世紀の間、城は放置状態におかれましては。

1865年、城は隣接する森とともにセレストアの街の所有になり、街はこの比較的よく保存された城跡を、1899年にホーヘンゾレルンのドイツ皇帝ヴィルヘルムII世に寄贈しました。(アルザス地方は1871年からドイツの統治領に編入されていました)

ヴィルヘルムII世はこのオー・ケーニグスブル城の修復を建築家ボド・エバルトにゆだねます。(1900-1908)修復の仕上げ事業とコレクションの買収は1918年まで続きます。ベルサイユ条約(1919年)によってフランスがドイツ皇帝の財産の新しい所有者となり、この城を国の管理下におきました。



案内書内の番号は地図とオーディオガイドの番号に対応しています。

## 案内書に従ってお進み下さい。

ティエルシュタイン家の紋章ついた**入口の扉**・10・を入ると、右手に比較的厚さのない城壁の壁(15-20世紀)があり、左手には突出した岩の上にある居住跡(12世紀-20世紀)がみえます。城の入口の**落とし格子**・20・を入ると**下庭**・30・があり、右手には厩舎をはじめ城全体の機能を司っていた建物があります。中央にはエギシュハイムに保存されていた15世紀の泉があります。住居への唯一の通路は塔からで、狭間によって保護されている**階段**・40・を使って進みます。これによって、侵入してきた敵はこの階段の狭間の下を通らなくてはなりません。扉と堀をまたぐ跳ね橋が、住居への最後の砦の役目を果たしたのです。

### 内庭

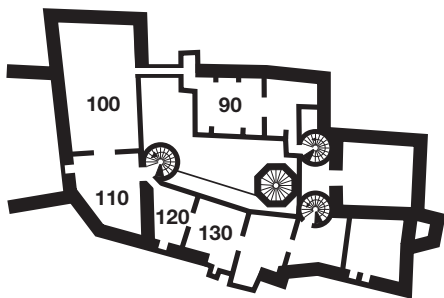
62 mの深さの**井戸**・50・は、大砲などで攻撃を受けた場合に住居と分離されないように防備されています。

回廊から**貯蔵倉**・60・に達することができます。この倉の長さが、城が載っている岩の幅に対応しています。

**内庭**・80・の南側の木製の回廊は、もとあった石の持ち送りの基礎の上に修復されたものです。北側住居の**台所**・82・にある流しと暖炉は修復されたのではなく現在の状態で保存されました。多角形の階段を使って城塞の主塔に上がることができ、また各部屋に通じている北側と南側の螺旋階段に達することができます。

### 三階

**北側住居**・90・の三階は、羽目板によって部屋の保温が工夫されています。



窓の近くには明かりのためのクシエージュ<sup>2</sup>と呼ばれる腰掛けがあります。ストーブは鋳物でできており、発掘調査ではふたつに割れて発見されたものです。**西側住居**・100・に進んでいきます。ドイツ皇帝カイゼルの部屋の皇帝の鷲<sup>3</sup>の印と紋章が、この部屋の政治的な意味合いを現しています。

壁画はレオ・シュヌグの作です。祝典の間とも呼ばれるこの部屋の奥に、一段と高い壇がありますが、これがこの部屋の当初の高さでした。**ロレーヌの間**・110・にある家具は、ロレーヌ地方の人々が皇帝に寄贈したものです。**南側住居**・130・の螺旋階段によって、礼拝堂の高壇に至ります。その横には、南向きの城の中で最も住み心地のよい部屋があり、便所が備えられています。これらの部屋は数珠つなぎにつながっていると同時に、外側の回廊から各部屋に入ることもできます。黄色い陶器製の暖炉は、発掘時にみつけたストーブのタイルを模造して作り直したものです。

## 二階

螺旋階段で下の階に達しますが、この階の間取りは上の階と同じです。その後、高壇のある**礼拝堂**・120・に達しますが、この礼拝堂は側面に入口が設けられておりできるだけ多くの信者を受け入れられるように配慮してあります。礼拝堂の次に、**狩りの記念品の間**・150・があります。

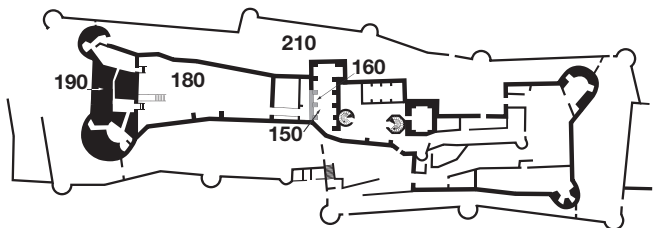
**武器の間**・160・には数々の矛槍、剣、大弓、甲冑、そして大きな緑色の釉薬をかけた陶器製暖炉が展示されています。この暖炉は模造品ですが、座る部分が暖められる仕組みになっています。

堀をまたぐ跳ね橋が西側住居と**庭**・180・を分けています。

窓や出入り口がある点から、16世紀に造られた庭よりも古いといえます。

<sup>1</sup>クシエージュ 窓の下に壁に一体になった腰掛け

<sup>2</sup>鷲 鷲を表した紋章



## 大城砦

攻め込む敵が西側の山の上から大砲をむける可能性があるため、その弱点を補強する目的で、**大城砦**・190・が建造され、住居を守る盾の役割を果たしました。階段を通過して跳ね橋を渡ると、砲座のある台に達します。

大きな南側の塔の窓から、ヴォージュ地方や平地の素晴らしい眺めが満喫できます。

大城砦の**北側の塔**からは、近郊の山頂にふたつの城、オルテンブール城 (Ortenberg) とフランケンブール城 (Frankenbourg) が見えます。そして様々な物資の行き交う街道の谷間が見えます。このように、この城は戦略的な観点から大変重要な位置を占めていました。砲座には15世紀から17世紀に至る大砲の発展をたどることができるよう大砲が展示されていますが、これらは模造品です。

下ってくると、要塞内の堡壘<sup>3</sup>を通過し、近代的な階段を通過して**北側の広場**・210・に達します。この広場は、左側を城壁と天井付巡回路、右側を内庭の壁を支える岩に仕切られています。そこから、3つの便所と台所の排水渠が見えます。壁にひび割れの入りやすかった住居と主塔を支えるための控え壁が造られています。ここから主塔をご覧になれますが、この塔は当初から四角い塔でしたが、16世紀に二つの檜の高さ(10~12 m)で崩壊し、20世紀の初頭に建築家が修復したものです。下庭に戻ると、右手に鍛冶場がありますが、1905年に城の修復のために整備されたものです。

<sup>3</sup> 堡壘 一般にヴォールトの天井を持ち、複数  
の大砲を据えた閉鎖された建物、トーチカ。



## 建築 | ゲンルマン民族の力の象徴

オー・ケーニグスブル（Haut-Koenigsbourg）城の与える力強い印象は、1.5ヘクタールにも及ぶその広大さに因ると同時に、**段状の形をしたバラ色の砂岩の壮大さのためであるといえるでしょう。**

この城の過去を振り返ってみると3つの時期に分けることができます。12世紀から15世紀前半にかけて、複数の居住者が城を所有してきました。

1479年以來、**戦術としての大砲の出現により**、それに対応するために修復が必要になりました。まず勾配が急になる位置に敵の大砲が据えられるのを防ぐための外壁、砲座、そして分厚い壁の防御塔が建造されました。また同時に住居も修復され、長方形の窓や出窓\*などが造られました。

20世紀の初頭、2世紀半も放置されていた城の修復が行われました。

城跡は比較的良い保存状態だったため、1862年歴史的建造物に指定されています。中世期および城塞の専門家として知られた建築家ボド・エバルト（Bodo Ebhardt）が、科学的な見地に基づいた研究を重ね、オー・ケーニグスブル城の修復をみごとに成し遂げました。

1900年に残されていた壁の高さは、マシクーリと呼ばれる石落としの高さの部分までで、ヴォールトも一部では保存されていました。これらをもとにしてボド・エバルトは15、16世紀の当時の姿まで修復することができたのです。しかし、建物の上部、天井などの一部で建築家が想像した部分もあります。この実証的な修復にもかかわらず、天井付の巡回路や塔の数の多さなどについて論議があったこともつけ加えておかななくてはなりません。

<sup>4</sup>出窓 各側の主窓に対して垂直な小窓

## 修復 |

現在のオー・ケーニグスブル城は、建築家ポド・エバルトが、ホーエンゾレルンの皇帝ヴィルヘルムII世の指揮下に行った修復の結実した姿ですが、この修復は、ここを皇帝の居所にするためではなく中世の博物館にするのが目的でした。またヴィルヘルムII世は、同時に再興した帝国とアルザス地方におけるゲルマン民族の過去の象徴にしようと考えたのです。

ポド・エバルトによる修復は、城跡の正確な実地調査をもとにし、写真、考古学的・歴史のかつ建築上の深い観察によって、現在でも見ることのできるローマ時代の跡を忠実に守りながら再現したのです。そのために彼は長い歳月を要してヨーロッパ各地の城塞を見学し、資料をひもといは研究を重ねました。ポド・エバルトは、このようにしてできた修復計画の是非を皇帝ヴィルヘルムII世に問い、皇帝の賛同が得られたのです。皇帝は毎年、城の修復工事の進行具合を見学にやってきました。彼は祝典の間の、上部フロアの修復を中断させ、より広い部屋を確保しようしました。しかしながら、建築家に対する批判がまったくなかったわけではなく、屋根の勾配や、統一された屋根瓦の使用、腕で回転する車ではなくて風車の修復などに関して異を唱える意見もありました。家具や武器などは20世紀の初頭に持ち込まれたもので、中世から30年戦争(1618-1648)に至る時代の武器の進展を展示するのが目的です。

数少ない模造品としてふたつの大箱とストーブを挙げることはできますが、これは希有なる芸術品の面影を一般の人々に見ていただくためです。

オー・ケーニグスブル城はその模範的な修復の結果として、さまざまなテーマ別の見学や、歴史的再現の観点からの見学にまたとない素材を提供してくれます。

### 参考文献:

LE HAUT-KÖENIGSBURG - Roger Lehni - Ouest France/CNMHS 1996

LE HAUT-KÖENIGSBURG - Éditions Schnell et Steiner GmbH Regensburg 1994

HAUT-KÖENIGSBURG - Connaissance des Arts, Hors série n° 88 1996

LE HAUT-KÖENIGSBURG MYTHES ET RÉALITÉ

L. Baridon et N. Pintors - CNMHS/CNRS éditions 1998

HAUT-KÖENIGSBURG - M. Waechter et V. Noto Campanella - Éditions Pierron 1999

Château du Haut-Kœnigsbourg

F-67600 Orschwiller

tél. +33 (0)3 69 33 25 00

fax +33 (0)3 69 33 25 01

haut-koenigsbourg@bas-rhin.fr

www.haut-koenigsbourg.fr

ALSACE

CONSEIL DÉPARTEMENTAL  
BAS-RHIN